



2010年(平成22年)
2月号(No. 777)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL●http://www.jac.or.jp

e-mail●jac-room@jac.or.jp

目次

今、日本の山で起きていること……	1
映画『アイガー北壁』と	
『アルプスの三つの壁』……	4
09年、アラスカとヒマラヤ、	
ふたつの登攀報告……	6
「再生と復権」4つのプロジェクト	
の現場から……	7
東西南北……	8
冬山天気予報配信効果を実感	
地上デジタル放送用鉄塔工事と古墳	
活動報告……	10
図書委員会／山研運営委員会	
支部だより……	12
秋田支部／越後支部	
図書紹介……	14
会務報告……	16
ルーム日誌……	17
図書受入報告……	17
会員異動……	17
INFORMATION……	18
山の博物館訪問……	19
岡田紅陽写真美術館	
お知らせ……	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 …… 10～20時
水・金 …… 13～20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 …… 10～18時

今、日本の山で起きていること

菊地俊朗

「地球温暖化」や「CO₂削減」などが話題になっている昨今だが、ふだん私たちは山を、登る対象としてしか考えていないことが多い。時にはやや広い視野から日本の山を見ることも必要で、そこでその現状を山岳ジャーナリストの菊地さんに報告してもらった。

課せられたテーマは、いわば環境の分野、登山行為とは直結しない。むしろ地域山村との関わりが深い。とはいえ、ともに山をフィールドにしている観点からすれば、課題を理解し、その打開、解決に協力的であるべきだろう。ただし課題は複雑、多岐にわたる。ここでは「草原の荒廃」「獣害」「埋まる谷」の3分野にしぼり、歴史的経過をふまえ、実情の一端と懸念

経営不振、閉鎖が続く牧場

「駒」と名のつく山は多い。木曾駒ヶ岳(2956^{メー})は甲斐駒と並んでその代表格。宮田高原は45年前、駒ヶ岳ロープウェイの開業で伊那谷からの入山口の座を奪われたが、かつてはここがメインだ

った。里から7、8^キ登った標高1600^{メー}地帯が台地状になり、昔から牧場があった。駒の山頂まで4時間ほど。宿舎やスキーリフトが架設された時期もある。

その牧場が昨平成21年、閉鎖した。後継者難でじり貧の畜産農家に、輸入飼料の価格高騰が追い打ちをかけた。先行きを悲観した農家が育成牛の購入をあきらめ、夏期に牧場へ預ける頭数が激減した。村公営とはいえ採算がとれない。すでに牧野放棄していた区域は山林の様相をみせ、牧草は伸び放題。管理は大変だ。

奈良時代以前から信濃は、甲斐、上野とともに馬の産地として記録されている。とくに信濃のウエイトは高く、平安期には東国随一の官牧、望月の牧などから毎年、貢

馬が命じられていた。信濃十六牧とか二十八牧とか、時代の推移でいわれるが、山地を拓いた牧場から公家用、伝馬用、搬送用と、貴重な馬が産出された。戦国時代には武田の騎馬軍団、70年前の日中戦争では、50万頭が軍馬として大陸へ運ばれたそうだが、産地は中部、関東の山間地に多かった。

この半世紀、全国各地に「高原」を自称する地名が急増した。宮田高原もそのひとつだが、前身は牧場、カヤ場だったところが大半。南アルプスへの入山口、旧長谷村(伊那市)の鹿嶺高原もそう。早々に牧場から撤退し、鋸岳、甲斐駒の眺望と草地を生かし、観光地化を図っている。その目算がかなっているかどうかはさておき、山岳環境を考える場合、過去の牧

場とカヤ場の存在を認識しておく必要がある。

入会地の現在

ご存知の方も多からうが、八ヶ岳を取り巻く標高1000メートル前後の山間では、国特別史跡の「尖石遺跡」をはじめ、縄文遺跡が多々発掘されている。奥蓼科の冷山や和田峠周辺から黒曜石が採掘され、狩猟用の鎌や、細工用の石器として全国各地に伝わった。いわゆる「近代登山」は200年足らずの歴史だが、この一帯は数千年の昔から歩き尽くされていた証明である。

近世、さらに明治に至っても、近在の農家は先を競って山入りした。田に鋤き込む柴草などの緑肥、薪、牛馬のエサ、山菜……。これらを山からの採取なしに生活できなかつた。集落ごとに入会地、採取期間、方法、さまざまな山論の末、縄張りと山林の維持義務が決められていた。

今、八ツの西面、茅野市には入会権を引き継ぐ財産区が48もある。市有地は2ヘクタールしかないのに財産区の総所有地は、市面積の4分の1以上の8000ヘクタール。八ツでは標高2000メートル付近まで(その上は国

有地)、霧ヶ峰の車山(1925メートル)も含まれる。

しかし、生活の変化とともに山村農家は山入りをやめた。その替わりに権利地を観光業や別荘地に転用を図った。白樺湖や蓼科高原一帯は様変わりした。同市内だけで別荘は約6000戸。他の市町村でも同様で、縄文ならぬ別荘回廊になった。そこへ大不況。スキー、スケート場はもちろん、閉鎖のホテルは続々。別荘族が山の手入れに積極的なわけがない。霧ヶ峰など草地景観は、長い柴刈りの末誕生したもののだが、カネの切れ目とともに山林に戻りつつある。守るべき原点の自然とは何か。放置林が望ましいのか。最近、諏訪市側では、地主の各牧野組合員らとボランティアが、年2回、伐採と野焼きを復活させた。

獣害の広がり

5年ほど前は「クマ騒動」だった。とくに富山で集中し、面談した同県自然保護課長はクマの元締め扱いに苦笑していた。次いで日光や志賀高原などでは旅館を、軽井沢では別荘を荒らすいたずらザル。今年は亥年でもないのにイノ



入笠山を疾走するシカの群れ

シシの出番。列車や車と衝突を繰り返し、長野市街地では3頭が大暴れ。2頭が射殺されたが、山村、農地への出没は日常的になってきた。なかでも、南アルプス、中信高原から八ツ、秩父山地にかけて、ニホンジカの大増殖は深刻。高山植物や樹木被害は目を覆うばかりだ。

なぜにわかに野生動物が跳梁するようになったのか。温暖化で越冬中の獣の死亡率が下がった、エサが豊富になった、狩猟者が減った、などいくつかの指摘がある。そのベースには先述したように、獣と恒常的に対峙してきた畜産農家や山村の縮小、消滅、崩壊が重なっている。

放棄された牧場はシカが占拠。

改良された牧草は量も栄養価もたつぷり。南アルプスの内懐、飯田市南信濃の山内屋三代目、片町彰さん(59)は「仕入れるシカが肥えてきた」と証言する。

各県で年10〜17億円と推計される獣害に、長野、山梨県などとはとくにシカの駆除に躍起になっている。長野は生息頭数を6万2000と推定し、毎年8300頭(オス2800、メス5500)を5年計画で駆除する方針を立て、3年目の平成20年度、初めて目標を超える1万4674頭をとった。

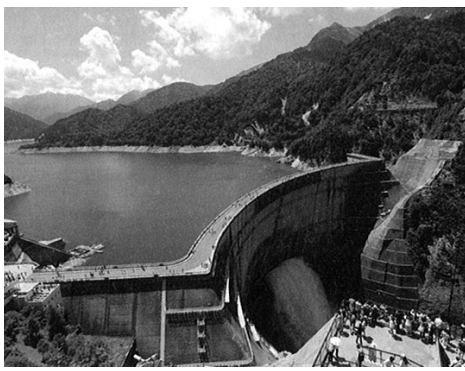
山梨の「戦果」はそこまで届いていないようだが、南アルプスの貴重種キタダケソウの被害を心配する芦安山岳博物館長、塩沢久仙さんは「数もだが、高所に進出したシカが問題。キタダケソウはキュウリ、大根と違う日本の財産だ」といらだちを隠さない。シカ、イノシシ2万円、サル1・5万円と報奨金を出す下伊那天竜村などの例もある。

サルの捕獲にはどこも手を焼いている。北アルプスでは個体数はそう変わっていないとみられるものの、上高地では観光客と出合っても平然。逆に菌をむきだしてお

です。クマの子の散歩も目撃されている。管理の環境省も「出合ったら追い払え」「エサは絶対にやらないこと」と、安易な愛護心の転換を公言している。人間様が動物にナメられてきているのだ。

ダンプの谷

地元では日常化して、さして問題視していない気配だが、この十余年来、私には気になる事象がある。南・北アルプスの大きな谷筋に入ると、にわかに空気がほこりっぽくなる。砂塵である。時間帯によりダンプカーが隊列をなして往來し、少しずつ荷台からこぼれた土砂が車道に貯まり、それが車の通過や強風のつど巻き上がる。



豊富な水を蓄える黒部ダムだが……

具体的に川筋を列挙しよう。南アでは小洪川、三峰川、早川など、北アでは高瀬川、梓川、黒部川……。これら河川の堆砂は並大抵ではない。周知のように、堆砂をもたらし

ているのはダムである。河川によっては堆砂レベルに開きはあるが、比較的傾斜の緩やかな南アの川では、ダム堰堤から5〜10^キ上流部までの川原が影響を受けている。皮肉なことにこれら河川では、砂利業者やその搬送業者が地域の主要産業の一角を占めている。山梨県早川町の場合、水力発電所が東電など計4社で12カ所ある。町といっても60年前、6カ村が合併した際は人口1万人を超えたが、今は15000人。そのなかで砂利業4社で70人前後の雇用を生み出しているという。

小洪ダムでは昨年からの排砂トンネルの工事が始まり、既存の砂利業2社に加えダンプの往來は激しい。三峰側の美和ダムではすでに排砂トンネルを完成させ、洪水を利用し、細かい土砂の流出作戦を始めている。国交省はほぼ見込み通りの結果を得たとみて小洪でも着手しようだが、美和では水流分岐にダムのためのダムも造った。

一方で砂利は再生材の登場もあり、川砂利業者の経営を圧迫、廃業も出てきた。堆砂との途方もないイタチごっこに出口はあるのか。

ピンチの水力発電所

雪解けとともに、高瀬の谷はダンプの行進が始まる。6台編成で1日5往復。東電高瀬ダム上流の不動沢・濁沢出合から運び出される土砂は年約15万立方。もう8年間続いている。ダム湖畔から不動沢を見ると、大雪溪のように土砂が数キロ先の稜線基部まで続いている。沢をまたぐ烏帽子岳への登山道吊り橋は、ダムができた32年前は橋下10^{メートル}以上の間があつたのに、昨今の洪水時は橋が水につか

る。登山者が流された遭難も発生した。一方で下流の水害が減ったのは確かである。しかし、想定量以上の土砂流入で、当初、計画の100年発電はおぼつかない。128万キロワット大発電所の寿命延長に東電は苦闘している。

黒部の谷では関電が、とくに樫平から下流部で悩まされている。黒2発電所7・2万キロワットへの小屋平ダムはすでに満杯。15年前の出水では黒2自体が土砂で埋まっ

た。土砂の間に流路を掘り、下流に排砂ダムを造るなどで対応しているが、下流漁業者との賠償問題も含め、深刻な事態は続いている。すでに国名勝猿飛峡は厚い土砂の下。山深いために黒部川周辺の事情はよく知られていないが、泉下の冠松次郎が現況を知ったらなんと慨嘆するだろうか。

黒部、高瀬の源流部については、三俣山荘の伊藤正一さんの指摘が気になる。伊藤さんによると、通称「裏銀座コース」や黒部川源流一帯の登山道が、年を追って少量の雨で流れになる。道の周辺でぽかっと穴があいて、水が噴き出してくるのを再三見かけるようになった。黒部、高瀬の2つの巨大ダムが満水になってからの傾向で、稜線部の地下水脈に変化が起きているのではないかと、推測している。地中のこと、とくに地下水圧とダムの因果関係などは軽々に方向づけできる話ではない。ただ、三俣、雲ノ平、水晶の山小屋を経営して60余年、年の半分を現地で暮らしている人の証言は重い。「山が膿んできた。雲海の発生が比較にならないほど増えたのは確かだ」と。究明に値する事象かも知れない。

カルチャー

映画『アイガー北壁』と『アルプスの三つの壁』

横山厚夫

この春に一般公開という映画『アイガー北壁』をひと足先に試写で見る機会を得たので、これについて少々書いてみたい。

一昨2008年、ドイツ・オーストリア・スイス合作のこの映画は、1936年にアイガーの北壁で起こった実際の遭難をなぞるとともに、幾らかの味付けのフィクションを加えて作った山岳劇映画である。なかなかいい出来で、私は楽しく見た。近ごろ、長い映画を劇場で見るのが億劫になっているが、試写室の窮屈な椅子にもかかわらず、この映画の2時間7分はそう苦にならなかった。双葉十三郎さん風に点をつけるならば、☆☆☆☆★の「上出来の部類」としてもよいだろう。

昨年来評判の『剣岳 点の記』で、柴崎芳太郎と小島鳥水のお二人が剣岳の初登を競ってなどとは、原作も原作、映画も映画で、もう、これはいけませんとなるのだが、この映画では、そうした人を惑わ

すような部分は少なく、味付けもこんなことがあっても不自然ではないと思う程度のもの。劇映画仕立てにするならば、このくらいは許容範囲と、私は寛容だ。

そして、学生時代に本で読んで驚き、しっかりと長く記憶に残るその登攀と遭難の各場面をうんうんとうなずきながら見た。

また、「カメラも一緒に登っているように見える映像を撮りたかった」「運命を分けたザイル」(2003年/英)のようなドキュメンタリー映画を手本にしました」という撮影担当者の言もよく、ロケーションであれ、冷凍倉庫に作ったセットであれ、その登攀場面の臨場感はいしたものだ。

*

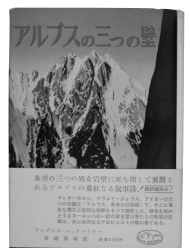
この映画が描くアイガー北壁での遭難を最初に本で読んだのは、半世紀も前のことになる。当時、山岳書の出版で勢いのあった朋文堂から出たエーデルワイス叢書の一冊『アルプスの三つの壁』がそ

れである。著者は、1938年にアイガー北壁の初登攀を成し遂げた4人パーティのうちの1人、アンデル・ヘックマイヤー、訳者は長越(安川)茂雄さんだ。いま改めて奥付を見ると昭和30年7月の発行となっていて、まことに古い。総ページ220ページ中に別刷り口絵写真が32ページ、本文中にも多数の写真が入る上製本である。定価は330円。

まだ、山登りを始めて間もない頃の私だったが、夢中になって読んだ。「巻を捲く能わず」だった。また、その後も何度か読み返し、今回の試写を見る前にも読んだ。

アルプスの鉄の時代、最後まで残されたマッターホルン、グラン・ジョラス、アイガーの北壁の初登攀をめぐる壮絶な物語を綴っている。ことに著者が著者だけにアイガー北壁に多くのページがさかれています。自身の初登攀はもちろんだが、それ以前の挑戦者たちにも詳しい。ことに2年前のオーストリア人のエディ・ライナーとヴィリー・アンゲラー、ドイツ人のアンドレアス・ヒンターシュトイサーとトニー・クルツの2組のザイルパーティの悲劇が詳細に語

られていて、要約すれば以下のようになる。



朋文堂刊、エーデルワイス叢書

1936年7月18日に登攀は始まり、彼らの行動は麓に陣取る新聞記者などの望遠鏡のレンズを通して逐一観察されていた。1日目の出発当初は順調のようだった登攀も、その日の夕方になると速度がにぶり、2組のパーティが1本のザイルに結ばれているのが見て取れた。なかの1人が頭に白く布を巻いている。どうやら落石によって負傷しているようだ。2日目のほとんどは霧が壁をかくした。3日目は天候が回復、一時は登高を続けるかに見えたが、やがて下降しだした。退却を決意したのだろうか、負傷者を抱えながら遅々としている。

4日目になってアイガーの山中を抜けるユングフラウ鉄道の保線係が北壁にいた坑道口から出てみたとき、近くで人声があるのを聞いた。彼らは無事に下ってきたに違いない。「お茶をわかつて待っ



『アルプス三つの壁』笑顔のクルツ

ているぞ」。

しかし、現われなかった。再度出てみると助けを求める声がある。保線係はさっそく麓から救援のガイドを呼び、彼らはトニー・クルツが唯一の生存者であることを知った。天候が悪化するなかで「もう一度夜がこせるか」「ダメだ」。

翌朝早く、ガイドたちが40歳ほどのところに近づくと、驚いたことにクルツはまだ生きていた。しかし、途中に難所があつて、それ以上は進めない。「もう僕一人なんだ」とクルツ。「ヒンターシュトイサーは墜ちた。アンゲラーは上で凍死した。ライナーは僕の下でザイルにからまれて死んだ」。ガイドたちはクルツにザイルを繋ぎながら懸垂で下りてこいというが、凍った手では難しい。やっと思いでザイルを伸ばしてきたが、あとが出来なかった。ピッケルを伸ばせば届くほどの近くまできたと

き、クルツの体は2つに折れ、それきりだった。

後年、英国の登山史家アーノルド・ランは、クルツをして「彼の勇敢な心は、登山家がめつたに要求されないような艱難、孤独、嵐の恐怖に耐えようとして闘ったのであつた。彼は、嵐にほんろうされた宙吊りのロープにぶら下がっていたが、降伏しようと決心しなかった。彼は降伏しなかった。彼は死んだ。登山の年代記の中に、これ以上に英雄的な忍耐の記録は、他に見当たらない」(『登山百年史』アーノルド・ラン著、馬場勝嘉・諏訪多栄蔵訳)と記している。

*

こうしたトニー・クルツであれば、70年以上も前の話になるにしろ、彼を主人公にして感動的な映画を1本作ってみようと考える知恵者がいても不思議はない。さらにクルツには恋人、ドイツ人による北壁初登攀をナチス政権のプロパガンダに役立てようとするジャーナリズムなどを加味して、山好き映画好きの私をおおいに喜ばせてくれたというわけだ。

とはいふものの、ひとつ不満がある。それはトニー・クルツを演



映画『アイガー北壁』のアタックシーン

じた俳優にあつて、なんとなくぴんとこないのだ。前記『アルプスの三つの壁』の口絵写真で見たとき、ああ、いいなあとこちらまで微笑んだクルツの笑顔、紅顔のトニー・クルツを見れば、だれもが楽しさを覚えないわけにはゆかなかった。トニーが笑えば、それはまるで生命そのものが笑っているようだった(『白い蜘蛛』ハインリッヒ・ハラー著、横川文雄訳、白水社)と描写される彼の笑顔が、この映画では見られなかったのである。クルツとヒンターシュトイサーはともに23歳だった。映画の2人には、そんな若さがなく、少々

トウがたつて分別くさいのを不満に思った。澁刺と若さいっぱいのクルツであつてほしかった。彼の生命そのものが笑っているような笑顔が見たかった。

しかし、こんなことは彼の写真を見ていなければ、べつに気にもならないことである。私だけの不満であらう。『劔岳 点の記』にするから、拒否反応が起こる。それに私は、あらためてこんなエピソードも思い出しているのだ。

今は昔、ヒッチコックがイングリッド・バーグマン主演の映画をとっているときのこと。バーグマンが「この脚本のここは理屈に合わないのでは」と文句をいった。するとヒッチコックが答えているには「イングリッド、気にするな。たかが映画じゃないか」。

まさに名言。でも、その「たかが映画」が私は大好きでやめられない。気に入った映画なら何度見てもよく、この映画もその1本に数えよう。ただし今回は試写室の貧弱なスクリーンでなく、また並びの悪い椅子で前の大頭にじゃまされることもない、迫力十分な映画館の大画面で見てみたい。

クロニクル

09年、アラスカとヒマラヤ、ふたつの登攀報告

谷口けい

カヒルトナ・ピークからカシンリッジを経てデナリへの継続登攀

2009年4月27日～6月7日
チームWASABI (谷口けい・鈴木啓紀・三啓育)

2008年5月に消息を絶った山田達郎・井上祐人が引いたライン・カヒルトナ・ピーク・カシンリッジをたどり、デナリに至る美しいラインを完結させたい、という思いをもつて出かけた。

4月29日、カヒルトナ氷河にBC設営。5月1日、イーストフォークとノースイーストフォークの中間にC1を作り、偵察。

5月2日からウエスト・バットレスルートを高所順応登山。8日、谷口・鈴木はデナリ頂上へ。三啓はデナリパスまで。入山からこのときまでは晴天が続いたが、BCへの下降中に悪天の周期に入り、降雪と強風でカヒルトナ氷河上はどこもブリザードとなる。

5月11日、BC帰着。鈴木はこのときの登頂で足指に血行障害を

負う。しばらくBCレスト。

5月18～23日、谷口・三啓で再度ウエスト・バットレスルートから頂上へ向かうが、強風のためフットボールフィールドまで。

5月25日、先日の偵察時に見つけた未踏のラインを登りにいく。天空へ向かって伸びる氷と岩の美しいひと筋。カヒルトナBCから東へ2時間弱、ハンター北壁を通り過ぎてしばらく行った所にあり、これまでその存在は知られていないと思われる。シュルント越えから頂稜のセラック下まで8ピッチ。下部2ピッチは脆い岩でプロテクションも悪いが、その先は快適な氷が続いて側壁も使えた。

ルート名Ⅱ「WASABI Gully」

8ピッチ WI4+M4X

5月27日から降雪が続く。結局、カヒルトナからカシンへ継続登攀はできず、断念することになった。

ガウリシャンカール東壁

2009年10月7日～12月7日

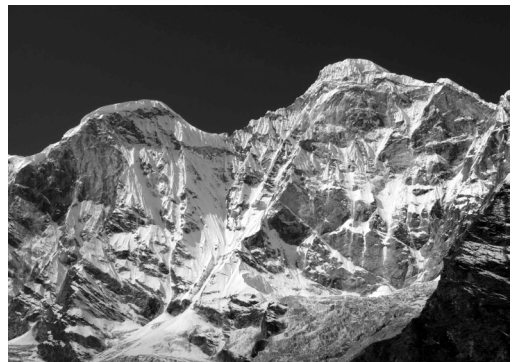
平出和也・谷口けい

ネパールとチベットの国境に位置するガウリシャンカール、未踏の東壁(チベット側)へ向かう。中国チベット登山協会から登山許可は出たものの、実際に現地へ行くと国境付近の特別地域だからと中国軍にストップをかけられる。粘り強い交渉の末、無事BCへと向かうことができた。

ガウリシャンカール東面のメンルン盆地に関する情報はほとんどなかったため、偵察を多方面から行なう。また、下降路確保のため、北東壁から北東稜を登攀するが、ナイフリッジとセラック帯がいやらしく、下降路としては使えないというところで6100メートル地点まで撤退。目指す東壁は、晴天続きで雪も氷も少なく、予定していたラインがつかえず、南峰へ突き上げるクローワールへと予定を変更する。

11月5日、BCを出発して東壁下部のアイスフォール帯末端へ。翌日、東壁基部まで。

11月7日、崩れかかったセラックを越え、直上するクローワールを登り始める。氷雪壁は上部へ行くほどに硬く薄く脆い。使ったプ



ガウリシャンカール東壁の全貌

ロテクションはスクリュー、スノーバー、トラйкаムなど。スラブの上に雪または氷、という箇所ではプロテクションが厳しい。ピバークサイトは氷をカッティングして小さなテラスを作る。

壁4日目。頂上直下、ヘッドウォールの核心部に突破口を開けず、6850メートルにて敗退を決めた。

下降はほぼ同ルート、アバラコフ懸垂15回と、スノーバーやチョックストーンでの懸垂、クライムダウン。下降を始めてから降雪が始まり、雪崩から逃げるように下降をつづけた。

11月12日、BC帰着。14日にBCを撤収して下山する。

レポート

「再生と復権」4つのプロジェクトの現場から

①「法人改革対応検討」

選択肢を精査し中間報告

「法人プロジェクト」は、「公益」「一般」のメリット、デメリットを精査し、1月29日、「中間報告」にまとめた。検討した選択肢は①「公益」②「一般」③「一般↓公益移行」の3つで、③は「一般」で認可を受け、公益目的の事業を、新法が求める基準で安定的かつ継続的に実施できる見通しがついた段階で「公益」へ切り替えるというものである。

新法はその運用に当たって、「公益支出」の認定など不確かな要素があるうえ、JACC自体、「支部」の定款上の扱いを含めた将来構想が課題として残っているためだ。このためどの選択肢をとるかについては、現段階での委員それぞれの意見を、参考までに添付するにとどめた。理事会や3月、6月の総会などで論議を進めていただき、周辺の諸情勢を勘案しながら結論を導いて、来年6月ごろ、いずれかの申請を、と考えている。(吉永英明)

②「JACC-YOUTH」

リーダー講習と若手会員増

4回目の会合を1月末に開き、若年層対象の企画を検討した。大きく分けて2つ。①JACCの将来を担うリーダー養成のための登山講習、②若手会員の募集、である。①に関しては、40歳未満の一般公募と学校山岳部の学生を対象に年間の机上講習(登山の基礎・ロープワーク・雪山登山入門・冬山気象・救急救命)と実地講習(無雪期の山、岩場で登山・フリークライミング・沢登り・雪山登山・雪崩講習と体験雪洞)を実施。講師は日本山岳ガイド協会認定の国際ガイド・登攀ガイドで、指導委員会などJACC会員が補助要因として加わる。募集人員は20人程度。②に関しては、地方支部30地点で夏山縦走程度の初級登山技術講習を行ない若い入会者を募る。会員募集の目標は150人。また、年間12回の山行を行ない若手会員の登山技術向上を目指す。リーダーはJACC会員とする。(古野淳)

③「支部活性化」

東京多摩支部誕生

本プロジェクトチームは神崎担当副会長をはじめ11名で構成され、昨年11月に結成をみて以後、数度の会合を経てその目標、方法を模索してきた。

目標としては、主に首都圏を対象に未組織地域の支部化を図り、既存支部と本部との連携を密にして、より充実した会員サービスを提供し、すべての会員に豊かなクラブライフを楽しんでもらうことである。目標達成のため、まずは支部の現状を十分に把握する作業から始め、1月末に全国支部事務局担当者会議が行なわれたのを機にアンケートを用意して回答を求めた。この結果に基づいてヒヤリングを行なうなどして活性化のヒントを探っていききたい。

全国支部化の促進は以前から本会の方針であり、この2月20日には29番目の支部として東京多摩支部が設立総会を開く。首都圏では2007年の栃木、茨城、千葉に続く支部誕生で、埼玉も4月を目標に、設立に向けて詰めの段階に入っている。(石橋正美)

④「山の日制定」

日山協など5団体が連携へ

当会の尾上会長ら役員が、このほど日本山岳協会(日山協)、日本勤労者山岳連盟(労山)の代表と会って「山の日」制定プロジェクトでの連携を呼びかけ、山岳団体が結束して「山の日」に取り組むことで一致した。日本山岳ガイド協会、HAT-Jも趣旨に賛同しており、5団体が国民運動展開に向けて連絡協議会(仮称)を設置する運びとなる。プロジェクトの具体的な進め方、協力の仕方などを話し合うことになる。

ところで、「山の日」制定プロジェクトでいま、会員一人ひとり、あるいは支部は、何をすればいいのかという声を聞く。会員各位にお願いしたいのは、まず「山の日」制定活動の趣旨を周りの人々にアピールしていただくことである。そして各支部は趣旨に沿ったイベントを企画し盛り上げ、参加者の輪を広げてほしい。推進本部であるプロジェクトチームでは、とりあえずアピール用のチラシづくり(5万枚予定)に取りかかっている。(成川隆顕)

東西南北

冬山天気予報配信効果を 実感

西嶋錬太郎

JAC冬山天気予報配信のことは会報『山』の記事で知っていたが、よく見ないままに08年12月末、バリエーションルートから奥穂高岳を目指し、悪天で撤退した経験がある。

今年冬は、2人でノーマルルートの涸沢岳西尾根から再度、奥穂高岳を目指し、帰路を西尾根南稜にとる計画を立てた。会報『山』に、今年も天気予報配信をするにあつたので、今度は利用させていだいた。12月30日から入山予定だったが「槍・穂方面が30日午後から1月2日まで大荒れ、一晩で1メートルを超す降雪、稜線で25メートルの風雪」という最悪の予報コメントを見て入山を2日遅らせた。

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

1月1日朝、新穂高温泉から歩き出したが、予報通りの積雪で大変なラッセル。穂高平あたりから撤退し下山してくるパーティと次々とすれちがう。そのトレールを使つて、なんとか2000メートル付近まで登って幕営。その晩、携帯電話でJAC予報が入手できた。この数日ほど最悪ではないが、相変わらず悪い。

翌2日、2400メートル付近に前後してテントが2つ。そのテントのパーティが、ジャンクシオンピークまで登って引き返してきた。彼らの話では、もう1つのテントは何日も前から無人だが、上部にはもう1パーティも見当たらないとのこと。

15時過ぎ、2720メートル蒲田富士末端にテントを張る。昨年泊まった場所でも少しおさまる。これも携帯電話OK。予報では明日3日も期待したほど回復しないよ

うだ。その晩は恐ろしいほどの強風、テントが押しつぶされそうになり、外に出て除雪。

3日、風が少しおさまる薄日も差す。よし、せめて昨年行けなかった涸沢岳までもと思つて出発。ガスでぼんやりした視界のなか、蒲田富士頂上目指し稜線を30分ほどラッセルしながら進んでいくとビシッという音。あわてて白出側に身を投げ出すと左の足元が30メートルにわたって大崩落。おそろおそろ左のチビ谷側を覗き込むと、垂壁にかぶさるように雪庇が5メートルほど張り出して続いている。過去のどの年よりも大きく、これも予報コメント通り。



ガスの中、頂上を目指して進む

さらに慎重に進むと、先頭の同行者の足に何か固いものが当たる。掘り出してみたら白いヘルメットに青いヤッケの凍結した遺体だった。多分、無人テントの人だろう。互いのGPSにこの緯度経度を入力、それ以上の前進をあきらめ連絡のため撤退、登りに幕営した2000メートルの安全地帯まで下る。

午後のJAC予報、槍・穂の明日4日は午前のみ晴れ。遺体はもう雪に埋まっているだろうから、ヘリから救助隊員が降りて探し、掘り出さねばならないだろう。時間がないと判断、留守宅本部に警察への届出を連絡依頼する。

4日朝、テントを撤収しているとき岐阜県警のヘリが飛来、雪に埋まって遺体場所がわからないのでヘリに乗って教えてほしいとのことだ。その場でピックアップされ、一歩も歩くことなく新穂高温泉に下山。

その後、警察の救助隊員と一緒に蒲田富士の上でゾンデ棒（プローブ）を使つてようやく遺体を発見した。予報通り、槍・穂の頂に再度雲がかかる少し前のことであった。ヘリが収容したのは3人パーティのうちの1人、残る2人は

まだ雪の中である。

正月の奥穂高でわれわれのように蒲田富士近辺までテントを上げるパーティは少ない。多くが2400^{メートル}の樹林帯で幕営、そこから軽装備で涸沢岳經由奥穂高岳への日帰り登山を行なっている。大変なロングルートで、トレールがついていて、しかも丸一日の好天が続くのならよいが、視界のきかない悪天では危険な行動である。

多分、今年の正月、奥穂高岳まで登ったパーティはなく、蒲田富士に届いたパーティも彼らとわれわれだけだろう。彼らは、12月30日午後からの激変する悪天に捕まってしまったのか、それとも別の出来事が起きたのか。悪天のせいだとすれば、JAC冬山天気予報を見ていたら、結果が違っていたような気がする。JACの予報は素人でもわかる。

今回、私は冬山天気予報を利用して、公益事業の中でも遭難防止に直結する大変有益な事業だと実感した。せっかくの予報、JACはもつと大々的に周知させその利用促進を図り、今後、予報山城の拡大や更なる精度の向上、そのための複数の予報官育成などを

目指していただきたい。

地上デジタル放送用鉄塔 工事と古墳

祖父川精治

三浦半島逗子市と葉山町の境にある小高い山頂、放送用鉄塔の設置予定地に大形の古墳が埋まっているのが発見された。

調査の結果、尾根続きの500^{メートル}先にもう1カ所、古墳が確認され、土器や埴輪等も出土している。4世紀前期の全長90^{メートル}と88^{メートル}の前方後円墳2基で、保存状態は良好、所在地名から長柄桜山古墳群と命名された。

東日本の古墳時代を考察するうえで重要な意味をもち、神奈川県内では最大級の古墳である。相模湾を隔て遠く富士山を望む景勝地にあり、2002年国の史跡に指定されている。平成の代になって、標高125^{メートル}の山頂からこのような大規模古墳が発見されたとは実に稀有なことである。現地の長柄桜山古墳群へは、JR横須賀線逗子駅から徒歩1時間である。

略して「地デジ」、地上波デジタ

ル放送用鉄塔の設置計画中のものでは、鎌倉の歴史的遺産である山頂や、放送用鉄塔で高さ約20^{メートル}を設置工事中の秦野市街地を望む丹沢の権現山244^{メートル}山頂がある。

現場に掲示されている工事の告知を確認すると「NHK他首都圏テレビ会社6社連名でデジタル用通信鉄塔及び局舎を建設するもの」とある。アンテナ用鉄塔と放送局用建物は各社共用で使用するとのことである。ほかの地域では、福島県只見川の沼沢湖近く全山ブナ林といった高久原山(1004^{メートル})に、放送用の電波反射板が設置されていた。

2011年7月24日までにアナログ放送から地上デジタル放送への完全移行がなされるという。受信者側のアナログテレビの買い替えだけではなく、放送局側の設備

変更や増設工事等も必要となる。

全国的にも、市街地を望む各地の山々へ、地上デジタル放送用鉄塔と付属設備が次々と設置されていくのではないかと案じている。

短歌

黒部川・上ノ廊下を溯る

ぬばたまの黒部の上ノ廊下行く九月の谷の水の冷たさ

薬師岳カールを仰ぐその下は荒々しき岩牙剥くごとし

谷底に着くか着かぬか探りつつ首まで浸かる深淵を行く

若き日の思い出語る出合にいや懐かしき岩苔小谷

黒部川渡る吊り橋近づけば岩の如き薬師沢小屋

西山秀夫

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

図書委員会

山を語る「女性の山」中村テルさんの時代」

中村テルさんの名前を、皆さんはご存じだろうか。結婚後の姓を名のった佐藤テルさんとしてなじんだ人も多いだろう。

中村テルさんは、1904年生まれ。明治・大正・昭和を生き、昨年に104歳で亡くなった。女性登山家の草分け的存在だ。同時代の女性登山家には、村井米子、黒田初子、今井喜美子、川森左智子、そして坂倉登喜子さんらの名があげられるが、テルさんは「女性の登山の幕開け」を担った最後のひとりだったと言える。

昨年末の12月14日、小倉董子さんをお呼びして、その中村テルさんの活躍と、同時代の女性登山家たちの肖像を語ってもらった。テルさんらを第一世代とすれば、小



左から黒田初子、今井喜美子、中村テル、田部井淳子の各氏

倉さんは第二世代にあたり、第一世代の苦勞を直接に目の当たりにしてきた証人だ。
テルさんが本格的に登山を始めたのは17歳の時だという。そして山に魅了され1927(昭和2)年の元旦には、強力のかげ房吉らとともに厳冬の富士山登頂。1931年には女性だけのYWCA山岳会を設立する。

しかし、テルさんの魅力は登山家としてだけではなく、女性の社会的な地位がまだまだ低い時代に、働く自立した女性としての存在感が際立っていたことだろう。堪能な英語力を活かして、日本フォード社に勤める。その美しさに、下山すると映画会社が待ちかまえて、女優への誘いがあったという。戦後はアメリカ陸軍の裁判所で同時通訳の仕事に従事し、下着デザイナーとしても活躍。たいへんな「キヤリアウーマン」なのだ。

しかし、この時代の女性の活動には制約が多かった。登山をする女性は「そんなお転婆娘は嫁のもらい手がない、と決めつけられていた」し、「ズボンとリュック姿で家を出られる女性はほとんどなく、駅の近くの知人の家とかお店に、山の道具をあずけるなど、すべてが秘密作戦であった」という。そんな時代に、家族や周囲の理解を得て登山を続けることが、どんなに困難なことであつたか。やむなく子どもを夫の家に残して離婚せざるを得なかった人もあつたという。しかし、そんな厳しい環境のなかで、文部省の登山研修所に女性用のトイレを作るよう働きかける



中村テルさんを語る小倉董子さん

ことから始め、女性の指導者の育成や婦人懇談会の結成などを、女性たちは世代を超えて連携しながら、ひとつずつ獲得してきたことも小倉さんから語られた。いま私たちが自由に山を楽しむことができるのは、そのたまものなのだ。感謝の気持ちを忘れてはいけない。
なお、中村テルさんの厳冬の富士山登頂を「女性初」と紹介されることが多いが、「女性登山教室」(成美堂出版)の中に「(黒田)米子さんが(中略)大正13年には冬の富士山に登っている」とテルさん自身の記述があり、「女性初」には疑問が残ることも小倉さんから指摘があったことを付け加えておこう。参加者は32名であつた。

(三好まき子)

山研運営委員会

冬の上高地を訪れて

暮れも押し詰まった09年12月28日から30日まで、家族3人、上高地の山研にお世話になった。中高年になって山歩きを再開した連れ合いは、中学2年生になる娘に、雪の穂高の雄大な山並みを見せれば、山への興味が高まり、山歩きにも積極的になるのではないかと期するところ大である。

28日の朝、特急あずさ号で東京を発ち松本に着き、そこから高山行きのバスで釜トンネルの入り口まで行く。上高地では雪が降っているとの連絡があったものの、バ



年末年始、開けられた山研で

スの窓から外を見ても、松本盆地には雪らしいものは見えない。しかしバスが新島々を過ぎ山道にかかるころからチラチラと雪模様となり、安房トンネル手前「中の湯」でバスを降りたときには一面の雪景色に粉雪が舞っていた。

釜トンネルまで迎えに来てくださった山川理事と斎藤委員の先導で、山研まで吹雪の中を約3時間の道のりを歩くことになった。降ったばかりの粉雪がこんなに滑りやすいかと思うほどサラサラとして、私は山研に着くまでに不覚にも3度も転んでしまった。

河童橋からほど近くにある山研は、地下の部分が石造りの立派な建物だ。食堂には薪ストーブが燃え、前日到着された方たち10人がゆつくりと寛いでおられた。昼食に太田理事心づくしのカレーライスをごちそうになり、ひと休みするともう夕餉。外は吹雪でも山研の中は暖かく、ビールやワインを傾け、キムチ鍋をつつきながら話に花が咲く和やかな夜であった。

翌朝7時、窓から外を見ると、穂高の稜線が朝日を浴びて桜色に染まって見える。文字通り雲ひとつない晴天である。帰京される方々を見送り、河童橋に出てみると、梓川の右側には明神岳、前穂高から奥穂高に続く吊尾根、そこから西穂高に続く山容が迫ってくる。下流を見ると、焼岳の山頂から噴煙が上がっているのがはっきり分かる。

梓川の南側の道沿いに明神まで散策にでる。明神館の前では正月を山で過ごすために涸沢に向かう男女数人のパーティに出会った。私たちは吊り橋を渡り穂高神社に参拝し、明神池に出てみる。観光シーズンには多くの人が訪れるにちがいないのだが、冬季は冬山の登山者限定で、私たちが明神池で出会ったのも、単独行の登山者1人だけだった。

帰りは梓川の北側の道を下ってみることにする。林の中の道なので、葉の生い茂った季節の見晴らしはよくないらしいが、今は木々もすっかり葉を落としてしまっている。枝の間から穂高の稜線が間近に見える。川面を覗いてみると、黒っぽいイワナが流れに逆らって何匹も泳いでいる。さらに行くと、道路を横切る薄茶色の生きものがある。よく見ると2匹のサルだ。近づくところの2匹だけで

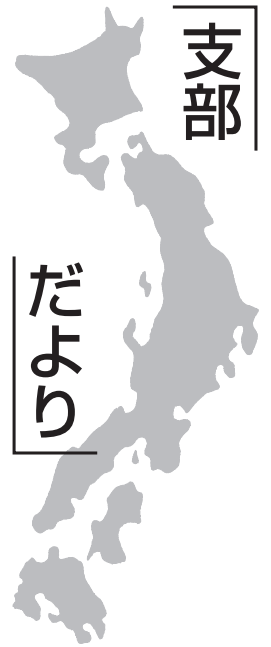
はなく、木の上でジーツとこちらを見ているサルもいれば、親子連れも何組かおり、母ザルの尻の上に子ザルが乗っていたりする。人の少ないこの季節には、サルも少しは落ち着いた生活が送れるのだろう。

冬の上高地を訪ねるという得がたい機会に恵まれたのも、山研に宿泊させていただけだからこそ。娘の山への関心はそれほど高まったとは思えないが、来る人が限られるからこそ静けさや、山の生きものの遭遇は強い印象を残したようだ。

(矢野伊津子)

支部

だより



全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

秋田支部
カプセル掘り起こし

10年前、秋田支部設立40周年記念行事の一つとして、会員が10年後の支部や自分に対しての思いを記し、カプセルに入れて太平洋山前岳に埋めた。あれから10年、支部設立50周年に当たる09年、掘り起こすことになった。

当初予定の11月1日が予報では雨だったので、一日繰り上げて10月31日、午前8時にザ・ブーン駐車場に集合、オーパススキー場を車で走り、二手ノ又登山口に向かう。

8時30分、スコップなどの掘り起こし用具を背負い、紅葉真っ盛りの樹林帯をゆつくり登り、前岳の目的地に到着したのは10時であった。掘り起こし予定時刻より1時間ほど早かったが、10年前の記憶をたどりながら埋設した位置を

確認し、藪の刈り払いをしてから掘り起こしを開始した。

「たしかこのあたりのはず」、「いやもう少し杉の木の根元近くだったはず」などと言いながら探す。笹が若干生い茂っていたものの、掘り始めて10分ほどで青いビニールが出てきた。

10時20分、タイムカプセル発見！ 後から来ることになっている佐々木支部長、進藤名誉顧問の到着を待つて、カプセルを掘り出した。ブルーのカバーに包装された中から黄金色のカプセルが姿を現わした。腐食もなく埋めた時と変わらず綺麗に保たれていた。

記念撮影の後、少し早めの昼食にした。鈴木事務局長から赤飯の差し入れがあり、また、進藤名誉顧問からは趣味で作っているホタテの燻製が振る舞われた。

昼食後、前岳までの歩道を刈り払いする。鎌や剪定ばさみの切れ



掘り起こしたカプセルの前で

味を自慢しながらの共同作業は久しぶりであった。

なお、タイムカプセルは、11月28日、乳頭温泉「鶴の湯」で開催の支部設立50周年記念祝賀会で開封される。

(鎌田倫夫)

前岳へ標柱設置

太平山は、秋田市内の登山愛好者のホームグラウンドで、前岳手前の神仙山神社(女人堂)までのコースに人気がある。前岳は、女人堂から尾根筋を10分くらい進んだ北側へ巻く道の右手前にあるピークで、知っている人は以外に少ない。大半の人は女人堂を前岳と

思っているらしい。

10月31日。10年前、秋田支部設立40周年に埋めたカプセルを掘り起こしに行った際に、前岳までの歩道を刈り払いした。その時に設立50周年を記念して、標柱を設置しようという案が出た。それはよいと設置する事に決定し、私が担当となった。

そこで、積雪の前に私の手づくりで設置をと思い、そこは国有林内なので、東北森林管理局の担当者に連絡し、早速作業を進めた。まず、低予算、安全で目立ち、長持ちをして登山者に喜ばれるもの、運搬に楽な現地組み立てなどを考慮し、秋田杉板に書体を彫刻刀で刻み、下地色は白、文字を黒とし、取り付けする材料を購入して1週間で完成した。

積雪前の好天に恵まれた11月12日、参加者5名、二手ノ又登山口から、組み立てるばかりにした標柱を、皆で分散して背負い前岳に到着する。好天に誘われて登ってきた登山者の一人が、われわれの様子を見ていて、手伝いをしたいというので喜んで参加してもらった。場所を決め、標柱を組み立てて設置する。周囲の藪を払い山頂

広場ができた。できたての山頂広場で、鈴木事務局局長差し入れの赤飯の昼食は格別においしかった。

カプセル掘り起こしの時と今回、歩道の刈り払いを行ない、標注の設置も行なつて、公益目的事業の一端を担つたものと思う。

後日、登山者から「前岳を初めて知った」「とてもよいこと」と好評をいただいて嬉しく思っている。

(堀井弘)

越後支部

第20回支部年次晩餐会

平成21年度越後支部年次晩餐会は今回で第20回を迎え、去る09年12月12日、新潟市東映ホテルで開催された。

出席者は支部会員87名、来賓に神崎忠男副会長と遠藤家之進正和新潟県山岳協会会長をお迎えした。14時30分、田邊信行事務局長の司会進行で開会となり、冒頭にこの1年間の物故会員に対してご冥福を祈り黙祷をした。

続いて、山崎幸和新支部長からの開会あいさつで、平成21年5月の支部総会で選任されてから今日までの支部活動状況と、全国支部

長会議の概要報告があった。そのなかで、「新公益法人移行への対応と支部活性化への取り組みについて、支部会則による内規の整備や事業活動をもつと活発化させるため、総務、事業、支部報、自然保護、図書、県山協の各委員会を立ち上げ、精力的に活動していかねばならない」との決意と、支部会員233名に協力要請が述べられた。

神崎副会長からは祝辞をいただいた後、配布された資料に基づいて、当会の現状説明と課題とその



盛会であった20回目の越後支部年次晩餐会で

対応についての講話を拝聴した。

「全会員の支部所属化を目指し、支部の充実した事業により全体の活動強化を図り、社会からさらに信頼される日本山岳会を確立したい。その対策として、新公益法人対策、支部活性化、〈山の日〉制定、若年会員対策の4対策プロジェクトチームを新設した。越後支部に大いに期待している」旨の、激励の言葉もいただいた。出席者は当会の現況を改めて知り、今後の取り組み、課題を十分認識することができた。

引き続き、遠藤県山協会長から祝辞をいただいた。その後、昨年5月と12月の役員会で推挙された、藤井信、杉原八百樹、内藤修、坂井厚、小野健、平田大六の6名の新支部名誉会員が紹介され、従来からの室賀輝男支部名誉会員とあわせ、越後支部に対する功労が称えられた。これに対し、代表して坂井支部名誉会員から謝辞があった。また、今年度新永年会員となられた、茨木弘、羽賀一蔵、桜井昭吉、坂井厚、笹川和男、本田文雄の6会員の紹介も行なわれた。

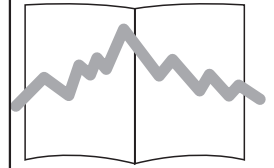
懇親会は、藤井支部名誉会員の乾杯の発声で開宴となった。宴の

頃合いを見て、今回出席の20年度入会の、宮崎幸司、海発泰子、笠原志郎、21年度入会の鶴本修一、高橋誠一の5会員が紹介された。

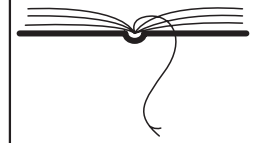
新入会員から自己紹介と抱負が語られた後、本間宏之副支部長から新会員に対し歓迎のあいさつがなされると、会場は新しい仲間の歓迎一色に盛り上がり、さらに楽しい和やかなときが延々と続いた。

17時45分、堂々として格式のある容姿の山田一介永年会員が、声高らかに関東一本締めを行ない「第20回支部晩餐会」もお開きとなった。

(本間宏之)



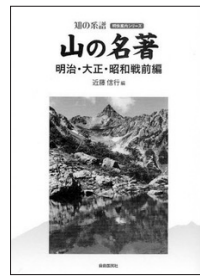
図書紹介



『山の名著』

明治・大正・昭和戦前編

近藤信行・編



2009年11月発行
自由国民社刊 A5判 272頁
定価 1785円

明治以降、日本に近代登山が始まってから刊行された山の本の代表的な作品78点を集めて、ダイジエスト版として紹介したもの。編者の近藤信行氏ほか、大森久雄、節田重節、横山厚夫らの各氏11名が解説執筆を担当し、羽田栄治氏の写真が載せられている。「知の系譜 明快案内シリーズ」に収められた読書ガイドだが、それにとどまらない内容を含んでいて、本書自体が、ひとつの山の本として読まれ得る興味をもつ。

全体は、明治から大正初期まで

の日本近代登山の黎明期を対象とした「Ⅰ 山へ行く」と、その後続く昭和初期までの「Ⅱ 山を抱く」の2部に分けられ、構成されている。

近代化とともにもたらされた近代登山は、まずは日本の山岳を舞台に、新たな山登りの実践を生み出していったが、その基層には「伝統的な旅ごころと美意識」があり、その上に、新たな山をとらえる「視線」が付け加えられることで、日本独自の山の文化が形成されていた。それは、次の段階に入って、多様なかたちで花開く。登山を楽しむ人は増加し、海外の山へも進出が始まる。それらを通して発表されてきた山の本は、まさしく、そうした多様な山とのかかわり、登山の軌跡を映し出している。

松浦武四郎に始まり、小島烏水、横有恒、坂本直行にいたる著作のなかから含蓄にとんだ文章が紹介

されているが、どんな一節、どんな章句を抽出したかは、まさしく解説者の、原著に対する読み込みの成果にほかならない。選び抜かれた文章は、ここで一冊の本にまとめられたとき、おのずと解説者自身の言葉とも重なり合って、さらに新たな語りの働きをもち始めている。そこからは、それぞれの山と登山に対する理解が伝わってくるが、それが何かは、読者がみずから読み取るべきものだろう。そんな山の本との語らいに、読者も誘なわれている。それに参加するとき、「古い山の書物を読むことは、松方三郎の言うように懐古趣味ではなく、新しい登山の基盤をつくるために必要なこと」だということ、改めて了解させてくれる。

本文には、「著者の横顔」や「本の履歴書」など各種の注釈が添えられ、多彩な原著者の人となりの紹介、あるいは原著の改訂、覆刻を含めての出版事情について懇切な説明があり、実際に原著を読んでもらうことを想定した情報提供がなされていてありがたい。

(飯田年穂)

『熱帯の水河』



2009年12月発行
山と溪谷社刊 25×27センチ 191頁
定価 5670円

水越武・写真

「生態系からみた地球」というテーマに基づき、国内外の高峰や壮大な自然の営みを地球規模で撮り続ける水越武氏。本書は、急激に進む地球温暖化の問題が「後退する水河」として顕著に現われている現実に向き合った水越氏の最新作である。

水越氏は1938(昭和13)年、愛知県豊橋市に生まれた。幼い頃から山の自然に親しみ、動植物への興味は増すばかりだった。大学中退後、ナチュラリスト・田淵行男の写真集『高山蝶』に感銘を受け、写真の道に進むことを決意した。田淵から山に対するひたむきな姿勢や、自然をリアルに直視する洞察力を学んだ。そして1971年に発表した「穂高」のシリーズで、厳然たる山の神髄を示し、山岳写真界に水越武の名を深く刻

むこととなる。

その視点は国内外の高峰から自然界の動植物界、日本の原生林や世界各地の熱帯雨林へと広がり、地球全体をとりまく生態系がテーマとなっている。水越氏の「自然の多様性こそが、地球を美しく彩り、豊かな表情を与え、美しく調和させる」という言葉は、地球に生きるわれわれ人類が、環境を常に視野に入れて生きてゆくことの必要性を訴えているのである。

現在、もっとも深刻で大きな環境問題は急激に進む地球温暖化であろう。水越氏がその現状を目の当たりにしたのは、今から30年前1979年のカラコルム五大氷河学術探査隊に参加したときのことであった。かつては人が通うことのできた道が、氷河の後退により北斜面が壁となり、近づくことすらできなかった。熱帯雨林の撮影に取り組んできた水越氏に「赤道直下に存在する山々の氷河」というテーマがおぼろげながら芽生えたのはこのときの経験からであった。

プロジェクトを具体化するに当たり、決定的となったのがルウェンゾリ(5095メートル)である。こ

の山は1906年、イタリアのアルプツィ公によって初登頂され、同行した山岳写真家のヴィットリオ・セラが撮影した写真は、イタリアの国立山岳博物館に残されている。水越氏は、100年前のその写真と現在の氷河の様子を比較することを思いつき、セラと同じ地点に立って氷河を撮影した。写真を比較すると、氷河が五分の一から十分の一以下に後退していることが窺われた。

本書は、海岸線、低地熱帯雨林、山地熱帯雨林、高山帯、氷雪帯と地域を垂直に分けて、生態系が変化しつつある現状を展開しており、氷河以外にも熱帯雨林の多様な自然をとらえている。作品タイトル、詳細な解説文にも英文が併記され、専門家、研究者にも配慮された内容となっている。(関次和子)

大野秀樹・著

『登山は元気を与えてくれる総合芸術』



2009年9月発行
N A P刊
A 5判 162頁
定価 1155円

登山の楽しみ、効用を新しい視点から解説した書籍が刊行された。著者の大野秀樹氏はわが国を代表する生理学の研究者で、同時に日本山岳会の医療担当理事や日本登山医学会の役員を歴任するなど、登山医学に関しても我が国の第一人者として知られている。

たまたま個人的に交流があり、2007年5月、蔵王山麓で第27回日本登山医学シンポジウムを担当させていただいた際、著者に特別講演をお願いしたところ、講演のタイトルが「登山と恋愛は総合芸術」であった。この興味深いテーマに、すべての聴衆が魅了されたことは言うまでもない。本書はその時の内容を中心に、さらに幅広い話題を盛り込んだものである。本来の研究テーマである生理学の立場からの解説が本書の中心になっているが、それ以外にも著者の貴重な体験に基づき、登山を多方面から分析していることが大きな特色である。文章は医療関係者以外にもわかりやすく、しかも全編にわたって上質なユーモアが鏝められ、あつという間に読破してしまうだろう。

本書のタイトルである「登山は

元気を与えてくれる総合芸術」の意味するところは、登山と恋愛はいずれも全脳機能を最大限に刺激しながら行なう身体的、精神的活動であるということだろう。また、登山も恋愛も人間本来のもつ生命力や本能を刺激し、それが少子化対策につながるのかもしれないと解釈しているが、こうした視点で登山がとらえられたことはこれまでにない。

さらに、本書が類書と大きく異なるのは、登山の効用に関して、漫画の主人公の台詞から文学書に至るまで幅広く引用しつつ、あらゆる分野から言及していることであろう。独自の解釈を展開する著者の卓越した考察力と文章力には敬意を表する以外ない。誰もが知らず知らずに「大野ワールド」に引き込まれてしまうことだろう。

なお、本書のイラストは、やはり日本山岳会医療委員の野口いづみ氏が担当しているが、ほのぼのとした優しい絵柄が文章と絶妙にマッチし、本書をさらに魅力的なものにしている。登山を愛する人々にぜひ一読をすすめたい一冊である。

(内藤広郎)

会務報告

平成21年度第9回(1月度)理事会

日時 平成22年1月13日 18時40分～21時まで

場所 日本山岳会会議室

【出席者】尾上会長、神崎・宮崎・

藤本各副会長、成川・岡部

各常務理事、太田・相馬・

山川・野澤・中山・谷川・

永田・萩原各理事、深川・

平井監事、近藤・酒井・森

各常任評議員

【委任】堀井理事

【審議事項】

1・支部設立の申請(神崎、東京多摩支部設立準備委員 山本憲一)

東京多摩支部(仮称)設立準備委員会から設立申請があった。申請書類には「会員名簿など一部」支部設立並びに運営に関する規定」を満たさない部分はあるが、常務

理事会で討議し設立後の運営については支障ないと判断した。2月20日に支部設立総会を開催する。

(承認)

【報告事項】

1・プロジェクトチーム報告(藤本、神崎、成川、野澤)

法人改革対応検討プロジェクト

チーム(以下 P.T)、支部活性化

P.T、JAC-YOUTH P.T、

および山の日制定P.Tの活動・取り組み状況について報告が行な

れた。

2・第10回ライチョウ会議東京大会に対する後援名義使用に関する

事業実施報告書(宮崎)

市立大町山岳博物館内のライ

チョウ会議事務局から第10回ライ

チョウ会議に対する後援名義使用に

関して事業実施報告書が送付され

た。

3・JAC冬山天気予報の見積書

(野澤)

(株)メテオテック・ラボから15万

7500円の請求があった。冬山

天気予報の利用者はおおよそ200

0人で昨年とほぼ同数である。

4・韓国山岳会からの礼状・案内

(宮崎)

韓国山岳会(会長 崔弘健氏)

から12月5日の晩餐会招待に対す

る礼状と今年4月～5月に濟州島

の漢拏山へのハイキングの案内が

あった。

5・2010年玉山開山祭招待状

(宮崎)

中華民国山岳協会(理事長 謝

長顕氏)から3月6日の玉山開山

祭の招待状がきた。海外委員会

で対応する。

6・平成23年度及び24年度にお

ける記念事項の照会(宮崎)

文科省競技スポーツ課から日本

郵政からの照会として記念切手発

行検討に資する記念事項の有無に

ついて問い合わせがあった。無し

と回答する。

7・神戸大学・中国地質大学(武

総会には出席しましょう。欠席者は必ず委任状の提出を！

漢) 岡日暖布山群學術登山隊報告

会および登頂祝賀会(宮崎)

12月26日、神戸市の神戸大学で

開催され、宮崎副会長が出席した。

中国側の登山隊メンバーも出席し

盛会であった。

8・海外登山基金応募状況(萩原)

今年度下期分を12月末で締め切

った。応募は2隊であった。1月

28日に審査委員会を開き助成の可

否、金額などを決める。

9・会報『山』1月号編集報告(成

川)

ルーム目誌

1月

27日	26日	25日	22日	21日	20日	19日	18日	15日	14日	13日	12日	7日	6日
自然保護委員会 総務委員	千葉支部 ゆきわり会 インターネット小委員会	図書管理委員会 支部活性化PT	定款検討委員会 山の日制 定PT アルパインフォト ビデオクラブ	指導委員会 JAC-YO UTH PT アルパイン スキークラブ	三水会 つくも会	山岳研究所運営委員会 ア ルパインスケッチクラブ	総務委員会 資料映像委員 会 00会	システムPT 多摩支部準 備委員会	学生会 法人改革対応検討 PT 山の自然学研究会 みちのり山の会	山岳地理クラブ 理事会 会報編集委員会	会 九五会 アルパインス キークラブ	図書管理委員会 図書委員	常務理事会 集会委員会 アルパインスケッチクラブ

平成21年度第2回通常総会開催のお知らせ 総務委員会

平成21年度第2回通常総会を下記のとおり開催いたします。万障お繰り合わせのうえ、ご出席くださいますようご案内申し上げます。

なお、ご出席予定の場合でも念のため委任状にご署名のうえお送りくださるようお願いいたします。

記

日時 平成22年3月13日(土) 午後2時より

場所 主婦会館プラザエフ スズラン (9F)

東京都千代田区六番町15番地

電話 03-3265-8111

議案 1・平成22年度事業計画及び収支予算承認の件
2・その他

*総会終了後、クラルテ(B2F)において懇親会を開催いたしますので、ぜひご参加ください。会費は3000円となっております。

*出欠の返事、委任状は3月5日までに投函ください。

30日	29日	28日
支部事務局担当者会議 1月来室者516名	総務委員会 法人改革対応 検討PT 多摩支部準備委 員会	海外登山基金審査委員会 山遊会

会員異動(1月)		物故	
勝田	川村	山内	増渕
和男(12980)	英二(12626)	敏旦(10926)	照治(8914)
			千代田英次(7556)
			近藤 彬(6742)
			退会
			鰐坂青青(11661)
			河野 吏(6842)
			金子丞二(6511)
			宮川初男(5654)
			10・9・12
			1・9・17
			24・6・20

図書受入報告 (2010年1月)

著 者	書 名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
小出郷山岳協会(編)	小出郷山岳史	278p/26cm	小出郷山岳協会	2009	発行者寄贈
駒ヶ岳ファンクラブ編集委員会(編著)	全国駒・馬の雪形——駒ヶ岳ファンクラブ創立20周年記念	87p/26cm	駒ヶ岳ファンクラブ	2009	発行者寄贈
大谷映芳	森とはほ笑みの国ブータン	207p/21cm	木楽舎	2009	出版社寄贈
日本山岳会東海支部(編)	東海・北陸の200秀山(東海・北陸編)上巻	213p/26cm	中日新聞社	2009	編者寄贈
日本山岳会東海支部(編)	東海・北陸の200秀山(東海・信州編)下巻	233p/26cm	中日新聞社	2009	編者寄贈



インフォメーション

◆甦る山岳映画——K2日本人
初登頂の記録「白き氷河の果てに」
を上映 資料映像委員会

1977年、吉沢一郎総指揮(日本山岳協会)による「日本K2登山隊(新貝勲隊長)」の本格的長編山岳映画。岩と砂と闘いながらの史上最大のキャラバン。悪天候と雪崩など幾多の困難を乗り越えての登頂。苦悩する山男たちの心理描写を見事に描いた、ヒューマン山岳ドキュメンタリー映画である。会員外の参加も歓迎。どなたも入場無料。上映約2時間。

日時 3月12日(金)18時～

会場 山岳会104号室

定員 40名

解説 羽田栄治資料映像委員

問合 羽田栄治

FAX 03-3339-3975

奈良千佐子

(☎mt.chisako@mbc.nifty.com)

◆夏の欧州アルプス登山&ハイイク
予告 集会委員会

昨年のドロミテに続く欧州アルプス登山の第2弾! シャモニからミディを越え、イタリア国内最高峰グランパラディソ登頂を目指す。

詳細は次号に掲載しますが、内容説明・概略案内書送付可能。

日程 7月20日(火)～30日(金)

費用 50万円位(保険・燃油付加)

一部ガイド料等別)

定員 20名(随時受託・先着順)

申込・問合 野崎和彦(TEL 090

1896111866

☎nozaki_kaz@yahoo.co.jp)

◆羽田栄治写真展「ネパール今昔
山と人」 大町山岳博物館

報道カメラマンの羽田栄治さんは、1960年ジュガルヒマール遠征隊に同行、登攀の記録を撮影。今年はその50年目に当たる。

当時と現在のネパール、山と人の暮らしにスポットをあてた作品展。当時のモノクロ写真、そして現在をカラーで約40点を展示。

会期 3月6日(土)～4月18日(日)

(ただし月曜日と祝日の翌

日は休館)

会場 市立大町山岳博物館

料金 400円

問合 大町山岳博物館(TEL 026

1-22-0211)

*3月20日(土)、羽田栄治ギャラリ

ートークと題し、記録映画「未踏

の氷壁」上映と作品解説を行ない

ます。

◆橋本勝写真展「谷川岳」

山岳会会員で、写真家でもある橋本勝氏による谷川岳の魅力に迫る写真展。

日程 3月5日(金)～11日(木)(10時

～19時、ただし最終日は14

時まで)

会場 富士フィルムフォトサロン

東京都港区赤坂9-7-3

フジフィルムスクエア2F

TEL 03-6271-3351

*入場無料

映画『カラコルム』および『花嫁の峰チョコゴリザ』 のDVDブックについて

このたび京都大学学術出版会から、DVDブック『カラコルム／花嫁の峰チョコゴリザ——フィールド科学のパイオニアたち』(梅棹忠夫監修)が発刊されることになった。1955年の京大カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊(木原均総隊長、今西錦司支隊長)と1958年の京都大学学士山岳会チョコゴリザ遠征隊(桑原武夫隊長)の映画のDVD判2枚(いずれも約79分、カラー)と、A5判250頁の書籍(各隊の歴史的意義、成立経過、行動記録およびその後のフィールド科学の展開、資料など)によるDVDブック。

価格は3990円だが、JAC会員には2割引き、3192円(税込)で販売される。送料は1配送につき1冊300円、2冊400円、3冊以上無料。発送の代行もやってもらえる(代行手数料は1件、プラス50円)。

申し込みは、氏名、所属(JACと明記)、住所、電話、支払い方法(郵便振替、銀行振込、カードなど)、申し込み冊数などを書いて、下記まで連絡のこと。

京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館内
京大学術出版会

Tel.075-761-6182 Fax.075-761-6190

岡田紅陽写真美術館

山梨県南都留郡忍野村忍草2838-1

☎0555-84-3222 <http://www15.ocn.ne.jp/~o-k.muse/>



入館料 一般500円、小中学生300円
※10名以上は100円割引

*特別展開催中は料金が変更となる場合があります。*併設の小池邦夫絵手紙美術館は別料金となります(共通券あり)

開館時間 10時~17時(入館は16時30分まで)

休館日 火曜日、祝日の翌日(土日を除く)、年末年始

交通機関 車: 中央自動車道[河口湖 I.C.]→東名高速道路[御殿場 I.C.]→東富士五湖道路→[山中湖 I.C.]を利用。また高速バス・電車・路線バス等の運行もあります。詳細はHPなどを参照ください。

——人生をかけて富士山を撮り続けた岡田紅陽の写真美術館——

岡田紅陽写真美術館(絵手紙体験学習館)は、富士山を望む絶好の場所、山梨県南都留郡忍野村に所在する。忍野村を含む富士北麓地域には年間を通じ多くの観光客が足を運び、富士登山をはじめ富士五湖周辺の自然を楽しんでいる。当館は絵手紙体験学習館(写真)として2004年7月に忍野村が体験学習・生涯学習の拠点として建設したもので、施設内に岡田紅陽写真美術館、小池邦夫絵手紙美術館があり、写真また絵手紙について鑑賞のみならず体験的に親しむことができる施設となっている。

展示室は写真美術館、絵手紙美術館、富士山を正面に望むことができる企画展示ホールがあり、年数回ネイチャーフォトなどのさまざまな企画展を開催している。また講座室・情報資料室・暗室等を備えており、各種講座やワークショップなどに利用されている。

岡田紅陽写真美術館では、紅陽の遺したガラス乾板およびプリント、並びに紅陽の使用機材や資料を中心に収集・展示を行っており、さらに富士山とそれに関わる自然環境に目を向けた作品などを収蔵している。常設展示では忍野村で撮影された作品を中心に約50点の作品、使用カメラなどの展示を行っており。特に1935(昭和10)年に富士五湖の一つである本栖湖で撮影された紅陽の代表作『湖畔の春』は、1000円紙幣のデザインに採用されていることから、作品を見るために遠方より足を運ぶ方が多い。

紙幣や切手などさまざまなものに採用されてきた紅陽の写真は、いつの間にか私たち日本人が心のどこかにもつ富士山のイメージの原風景となっており、初めて写真を見た方でもその富士に懐かしさを感じる。富士山写真の先駆者でもあり、「富士こそわがいのち」と誰よりも富士山を愛した岡田紅陽の作品をぜひ一度ご覧ください。

■お知らせ

1月(776)号、10ページ1段目に掲載の図について説明いたします。スケッチは、米地文夫氏の作品で、山形県総合学術調査会編集発行「朝日連峰」地理篇331ページ「直江兼統と朝日軍道(渡辺茂蔵・著)」のコピーになります。

(会報編集委員会)

■訂正とお詫び

1月(776)号、1ページ3段10行目から4段4行目までを、筆者の山森欣一氏の意向により削除します。2009年5月、ネパールのクワンデにて、加藤泰平、佐藤達也の2名が転落・死亡しておりました。

1月(776)号、16ページ2段22行目「永田秀樹」氏は「永田弘太郎」氏の誤りでした。

ともに訂正してお詫びします。

◆編集後記◆

●新聞記者として活躍されていた菊地俊朗さんに、「環境から見た日本の山」の原稿をお願いしました。難しいテーマですが、われわれ登山者もいつもどこかで気にしていかなくてはならない問題だと思えます。

●ずいぶん以前のことですが、山岳会の副会長を務められた吉沢一郎さんの家に、毎月、通っていたことがありますが、いろいろなお話のなかで、まず目を通す新聞の死亡欄に、知人や友人の名を見つけ寂しい思いをするとおっしゃっていたことを鮮明に覚えています。今月の「会員異動」物故欄を見て、あの方もこの方のもと、吉沢さんの気持ちに少しわかるような気がしました。ご冥福をお祈りいたします。(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 777号

2010年(平成22年)2月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビューハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 尾上 昇

編集人 神長幹雄

Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社